

初期金沢城の実像を追って

- 2002年度の埋蔵文化財調査から -

吉岡 康暢

粉雪の舞う1月16日、東ノ丸唐門前調査区で、それまでに検出されていた南北方向に連なる元和期（1615～24）の石垣基礎石と、直行して東に連接する石段（雁木）の下にもぐりこむ形で文禄・慶長期（1592～1615）の石垣が土中から姿を現わし、本年度の棹尾を飾る発見となった。金沢城が現景観に改変されたのは、政庁と藩主屋形が本丸から二ノ丸へ移る契機となった、寛永8年（1631）の城下・城内大火後の大改造によることは、菱櫓・五十間長屋の平成修築とともに発掘調査でほぼ明らかになっており、また、『三壺記』の記事から、文禄元年（1592）に始まるとされる石垣が、小立野台地と対峙する百間堀側に遺存し、石川門に近い水之手門から城内へ折れこみ本丸北面まで続いていることは判っていたが、慶長期に遡りうる虎口（出入口）に関する新知見がえられたのは、これが最初である。

現在鶴ノ丸から本丸への出入口は、東ノ丸附段の石垣沿いに迂回し、南進後食い違いに造られた舟形を東に折れて登坂し唐門跡に至るコースをとっている。ところが、今回発見された文禄・慶長期の虎口は、南西隅へ直進し、現在の石垣の下を通り本丸へ通じる。このような虎口の存在は、文献・絵図にみえないものであり、発掘調査によって遺構をつきとめた意義は大きい。虎口の変更と本丸の空間構造の変化がどのように連動するのか、本丸へ城外から通ずるルートや、途中の施設も含めた興味ある課題が提起されることになる。

この古虎口の脇を固める石垣と上層の元和期の石垣の方位は、いずれも現石垣に直交せずN約50～60度Eに偏して開口するようである。筆者らが昭和44年（1969）度に行った本丸の発掘調査⁽¹⁾において、本丸と附段を画する石垣に開く鉄門の東約70mの地点で、四脚門と建物入口の石段が検出

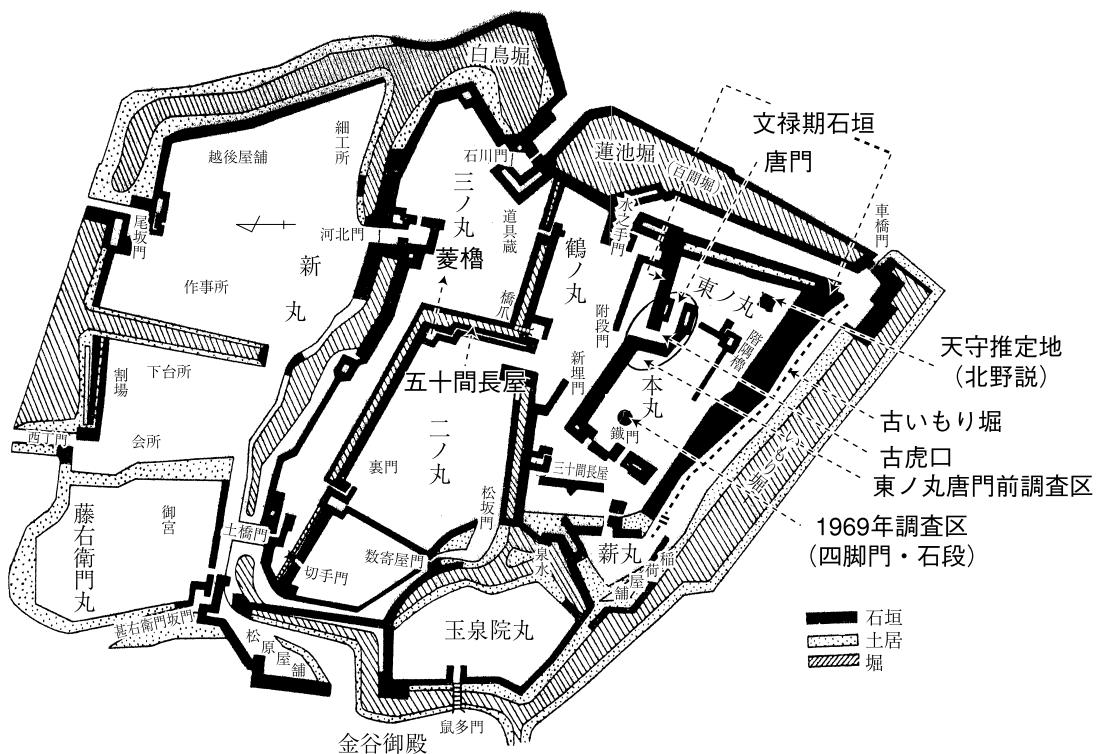


図1 金沢城調査要図



写真1 東ノ丸唐門前調査区全景
(破線は埋めこまれた部分)



写真2 初期金沢城本丸入口 (虎口) 関連遺構
通路側壁石垣 (古段階)

されたが、鉄門の石垣ラインと軸線が異なりN 30度Eを指し、古虎口に近似するのが注意される。古虎口はなお、通路面まで掘り下げる最終的に確定する作業が必要なもの、寛永大火以前の初期金沢城の構造を把握するという調査目標からすると、大きな突破口を開いたといえるであろう。

じつは、この古虎口の存在は、発掘調査前、本丸北面石垣の観察で南東隅の最下段の3石ほどが古相をとどめる算木積み(隅石)のまま埋めこまれ、周囲の石垣と不整合な面をなすことから、一応予測されていた。また隅石に東接して、枠形門を化粧する鏡石とみられる大ぶりな石が2個認められることも、その傍証かとされていた。ただ、石垣は星霜を経て積み直される宿命をもち、基礎石と地上に露呈した石垣で年代の齟齬を生じることは珍しくない。今回も、上層で検出された赤戸室の基礎石の一つに、寛永期(1624~44)に盛用された刻印の一つである「申」印が確認された段階で、古虎口案は霧消したかと思われたが、下層からやや軸を振り、面を逆の西向きにとる石列が検出され、さきの古虎口推定ラインに直結したことで、調査室のスタッフの執念が実ったのである。その意味で、考古学のもつ発掘の強味を十分に發揮した成果であり、今後の初期金沢城の解明において、考古学的調査の重要性が再認識されたものといえよう。同時に、文献史学・建築史学などの学際研究が益々重要となっており、そのような総合調査が期待されるところである。

ところで、唐門前調査区において、唐門に向かうL字形になるとみられる石段が寛永大火層の下部で検出されたことで、本丸出入口ルートが寛永の大築城によるという事前の予測を覆し、元和年間に遡ることが推認される。つまり、石垣編年からいわれていた通称鶴丸倉庫が建つ東ノ丸附段の造成と、一体的な事業であることが判明したのである。この所見は、東ノ丸附段南東隅の複数のトレーナーで元和期の石垣基礎と造成土が検知されたことでも補強される。

前田利家夫人芳春院が没後3年目の元和6年(1620)12月の本丸火災は、「御奥方御次之間置圍爐裏の底に火残りて、縁の下へ火移り、ねだ敷に燃付大火に成、本丸御屋形不残焼失也」(『老翁雜記』)と伝えるが、火災後の再建工事が本丸の拡張・整備の重要な画期であったことがあらためて浮上してきた。

そこでまず問題となるのが、金沢城最古の絵図としてしばしば引用してきた、いわゆる「慶長金沢図」の評価である。これについては濱岡伸也によって、2種類の慶長金沢城図の存在と相互の相異について考察され⁽²⁾、2種類のうち「主図合結記」系の初期金沢城図(本書掲載の金沢城全域絵図目録参照)では、石川門と尾坂門の枠形(内側開口部)が寛永8年絵図と反対の方向に開く点などは、寛永大火以前の初期金沢城につながる特徴であるという。これをうけて、本書の木越隆三の論稿でも

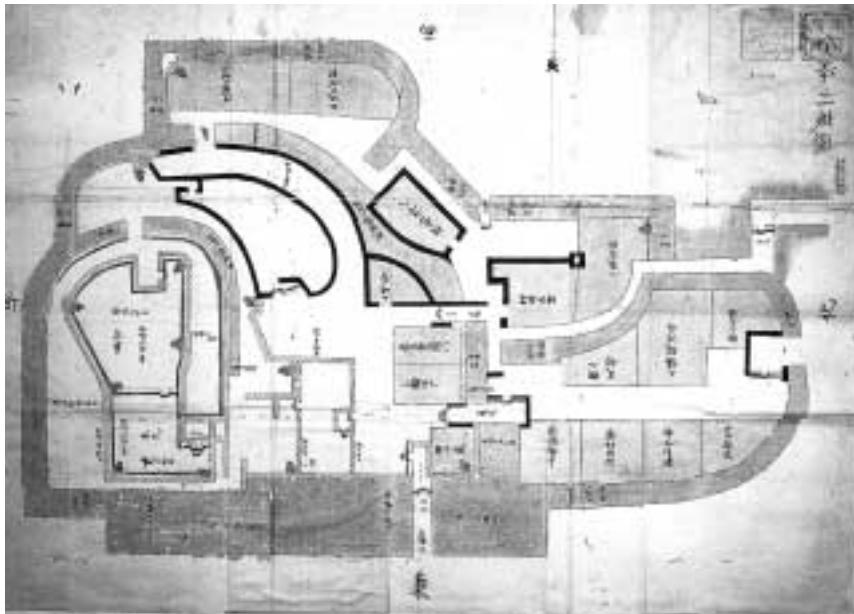


図2「加州金沢之城図」(東京大学総合図書館蔵)

この問題にふれ、「主圖合結記」系の初期金沢城図は、居城普請許可を求めるため元和7年もしくは寛永8年に幕府に提出された絵図情報が漏れたものと推測しているが、興味をそそる課題といえよう。もっとも、兵学者たちによって描かれた初期金沢城図の情報を持って、直ちに発掘所見と単純に結びつけることは危険であり、考古学的な研究方法を一層駆使し、初期金沢城の姿を解明することが重要であろう。それが、城絵図研究や編年に大きな光明を与える

ことは間違いないものと思われる。

また、元和期の改造工事が城内にとどまらず外部施設によよんだことは、すでに平成12年度のい

もり堀調査区で、現在の外郭堀線の石垣沿いに古いもり堀が検出され、新しいもり堀へのつけ替えは、慶長期中頃(1600年代初頭)と想定されたが⁽³⁾、出土陶磁器の検討から元和期に下る公算が大きい。古いもり堀の外郭堀線を元和以前の本丸を核とする金沢城のエリアとしてよければ、昨年11月22日、埋蔵文化財専門委員会のメンバーが城内巡査を終えた帰路、玉泉院丸跡へ入ったさい齋藤慎一が降り口の急スロープに注目し、古いもり堀の延長線上の堀跡が遺存しているのでは

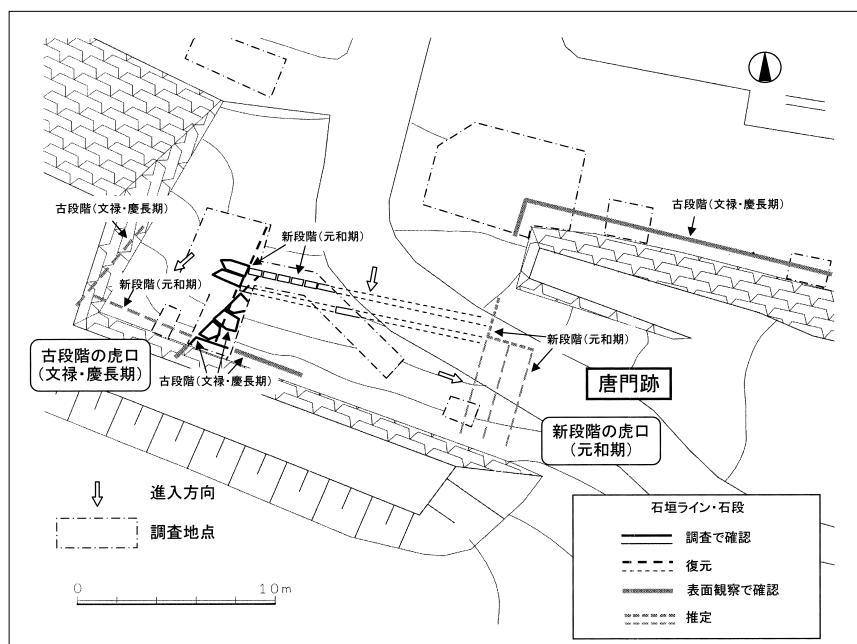


図3 東ノ丸唐門前調査区模式図(『年報1』金沢城研究調査室 2003)

ないか、との指摘が大方の賛同をえた。その確定は今後につつとして、豊臣家の滅亡によって戦国時代が終焉を迎へ、翌元和2年の領内惣検地の一環として、金沢城下で直線の石引道と野田道を軸線とする町割りが実施され、卯辰山麓と寺町台に「寺町」が出現し、宮腰道が外港宮腰(金石)に通じた。元和の本丸火災は遇事とはいえ、金沢城を近世地域権力の表徴である“見せる城”としての整備を加速させることになったのであろう。

そして、古いもり堀に囲まれた初期金沢城の姿を文献史料に求めると、天正12年(1584)3月13日付の丹羽長秀宛羽柴秀吉書状にみえる「(上略)其國中者不及申、自然、加賀表に一揆など催

をこり候共、又左合戦に不被及、彼金沢之惣構を相抱、丈夫之覺悟於在之者」云々の文言⁽⁴⁾は、大きな意味をもつ。初期金沢城と城下町の惣構⁽⁵⁾については、詳細な検討を要するが、利家が入城した翌天正12年頃の城下は、寺内町段階の「山崎凹市」や「後町・南町」、「泉町」などの町場が、城郭の周囲と水陸路の交点にブロック状に存在する同心円構造を継承し、面的・計画的な近世城下町が形成されていたとは考え難い。関ヶ原前夜の慶長4年(1599)と大坂の陣直前の同19年(1614)の構営とされる、金沢城下の内・外惣構のような、惣構の概念をこの段階で想定するのは、妥当性を欠くように思われる。一方、当該期の城郭の縄張りの解明も今後の課題であるが、本丸ゾーンを核に北西と北東へ張り出す二俣の尾根を段状に整形して複数の曲輪^{くるわ}が造成された、「双頭梯郭式^{ていかく}」のプランをとっていたと推察される。既往の城内の発掘調査の所見を総合すると、城主屋形 上級武士、および慶長4年以降城地とされた新丸地区に商工業者をとりこんだ、求心性の高い、階層・職種が重層する惣構構造が予測できる。さきの秀吉書状の2日後の3月15日には、織田信雄^{のぶかつ}と同盟した徳川家康が北尾張小牧山に本陣を構えており、古いもり堀を「惣構堀」の西辺としてよければ、秀吉対家康、利家対佐々成政の軍事的緊張を背景に、古いもり堀が堀削ないし拡張された可能性を示唆する。来年度に予定されている、いもり堀の調査が待たれるところである。

なお元和期は、石垣編年でも自然石・粗割石を用材とする文禄・慶長期から、石材加工が格段に進み、規格的な石積み法が完成する寛永期へ、石垣技術の大きな転換期でもあった。元和期の石垣は、東ノ丸附段のほか、百間堀通りの下段や新しいもり堀ラインの一部、玉泉院丸から北の大手堀へ続く石垣など、外郭星線の広い範囲で確認されていて、初期金沢城の完成を意図した大規模な改造工事をうかがうことができ、その過程で石材加工技術の革新が図られたかと思われる。

上記で2002年度調査の一端を紹介したが、ほかの初期金沢築城プロセスについて得られた所見は、『年報1』を参照いただくとして、究極の目標が佐久間盛政・前田利家の入城と築城を契機とする天正8～文禄4年(1580～95)の15年間の解明にあり、その点では天正期金沢城の捕捉が容易でないことを実感させられた1年でもあった。北野博司を中心として検討を進めている金沢城石垣編年⁽⁶⁾は、全国城郭の規範となりうるものであり、築城プロセス解釈の指針となるが、なお、天正期と文禄期を識別する確かな指標を設定するに至っていない。文献で最古とされる文禄元年の石垣は、前記のごとく百間堀側から水之手門で折れ城内の東ノ丸附段背後へめぐっている。とくに、丑寅櫓直下では定型化されない算木積みの隅石が文禄期の石垣に埋めこまれた形で存在し、天正期に遡る可能性が指摘されたが、文禄築成石垣の構築過程を示すという修正意見が出ている。しかし、ほかにも平成12年(2000)度に調査された藤右衛門丸調査区で検出された石垣について、西野秀和は鳥越城跡との比較から、天正年間に城地北西辺まで伸びていた石垣星線の一部ではないかと予測する。

金沢城における石垣の初現とかかわって看過できないのは、天守閣の存在である。慶長7年(1602)



写真4 丑寅右方櫓台下の文禄期石垣
(破線は埋めこまれた部分)



写真5 発掘された本丸三階櫓台跡
(『金沢城跡』石川県教委1993)



写真6 「金沢城三階御櫓之図」
(金沢市立玉川図書館蔵)

10月30日、「御城天しゆへかみなりおち」(『象賢紀略』)炎上したことは周知されていたのが⁽⁷⁾、建造時期については、見瀬和雄が「去年かい置候くろかね(中略)天守をたて候ニ付て入申候」(『小宮山家文書』)と記す年記を欠く利家書状を、天正14~15年(1586~87)に限定されると指摘し⁽⁸⁾、また瀬戸薫は、利家が盛岡藩南部家家臣北信愛を天守に案内したとする記事(『信愛覚書』)を考証したこと⁽⁹⁾によって、天正14年6月から15年4月(1586~87)頃と考えられるようになった。罹災後再建されなかった天守石垣台の構造を知ることはできないが、三層程度の小規模な礎石建としないかぎり、天正後半期の石垣が実在したことはほぼ確かであり、昭和44年(1969)度の発掘調査⁽¹⁰⁾で検出した、本丸と東ノ丸境の三階櫓台基礎石は宝暦9年(1759)の大火まで存続し、幕吏を饗応するなど天守の機能を代替していたとされ、罹災直後の再建と考えられるだけに、石垣編年の定点資料としての再活用を図るべきであろう。

なお、天守の位置については、利家が金沢入城をはたした天正11年9月に築城に着手した大坂城では、鬼門にあたる北東隅に天守が築かれ、富山城・高岡城など前田氏関係の諸城でも、天守が隅櫓を兼ねる事例が多いという佐伯哲也の指摘⁽¹¹⁾をうけ、天正期に遡る可能性がいわれた石垣上部の丑寅櫓を想定してみた⁽¹²⁾。その後北野は、「金沢城東之御丸・御本丸絵図」(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)と、「築山之跡之有。石も有之候。昔ハ高ク候哉。當時ハ少高ク候」(『後藤家文書』)の記事を照合させ、南東の辰巳櫓の内寄りを比定地とし、付近に井戸が設置されている点にも注目している⁽¹³⁾。「(篠原)出羽守承りて、石垣を八分通りつき立て、少えんを出してつき、成就しければ、利長公以の外御腹立にて、高石垣に段をいたしたる事は、沙汰の限り」という『三壺記』の伝承記事は、状況判断ではあるが、あくまでも「高石垣」の構築をめぐるエピソードであって、金沢城石垣の始源を語っていないと解されるのである。

天守閣の位置をめぐる問題は残るが、造立の史的意義もあわせて議論を深めてゆかねばならない。天守創建の前年、天正13年は、4月に織田政権の宿老であり豊臣政権の重鎮となった丹羽長秀が没し、8月には秀吉軍が家康幕下の越中国守佐々成政を制圧、利長が越中3郡を領有し、前田氏の北陸における霸権が確立した年である。しかも、北ノ庄城(福井)にあって北陸道を統轄していた長秀の死にともない、金沢城は北辺の「一ノ木戸」(支城)から、北陸・東北をあさえる大坂の支城へ昇格している⁽¹⁴⁾。また利家は、天正14年3月上洛のさい従四位下左近衛権少将に叙任され(天正13年11月29日付)、「羽柴」姓と「筑前守」名を授かり、秀吉政権の親藩筆頭として「公家成」⁽¹⁵⁾の身分序列に編入され、翌14年12月には「豊臣」姓を賜与されている。天正13年の大坂城天守の竣工をうけた金沢城天守の造立は、前田政権確立の記念碑^{モニュメント}と考えてよいであろう⁽¹⁶⁾。

金沢築城プロセスの解明は、近世城郭研究を主導し、金沢城公園整備の基礎データを提供するだけでなく、県民と情報を共有しつつ、石川の文化の創造に寄与することが期待されている。金沢城を構成する堀・石垣・建物などは、外様の雄藩前田家の権力のシンボルであるが、反面幕藩制国家時代の政治・経済・文化のかなりの情報が総合され、都市民の“モノ(手)づくり”の技と心が集大成されているところに、今日的な存在理由と歴史性が存在すると思う。小稿は短文の隨想になったが、研究所の設置を提言してきた一人として、20年計画の調査事業の進展を心から願っている。

【註】

- (1) 吉岡康暢 「金沢城の発掘」喜内敏編『金沢城と前田氏領内の諸城』1985年
- (2) 濱岡伸也 「二系統の『慶長金沢城図』について」『石川県立歴史博物館紀要』8号、1995年。なお、類図の系譜・伝来については、北垣聰一郎「有沢永貞『諸国居城之図』をめぐる考察」『横田健一先生還暦記念日本史論叢』1976年参照
- (3)(財)石川県埋蔵文化センター「金沢城跡いもり堀発掘調査の成果」(記者発表資料)2000年
- (4)「加越能古文叢41」『新修七尾市史』3(武士編)収録、2001年
- (5)前川 要 「『惣構』の成立と展開」『豊臣秀吉と京都・聚楽第・御土居と伏見城-』日本史研究会編、2001年ほか
- (6)北野博司 「加州金沢城の石垣修築について」『東北芸術工科大学紀要』8号、2001年ほか
- (7)濱岡伸也 「金沢城の慶長火災について」『石川県立歴史博物館紀要』10号、1997年
- (8)見瀬和雄 「金沢城の創建」『利家・利長・利常・前田三代の人と政治-』2002年
- (9)瀬戸 薫 「『北信愛覚書』について - 天正15年の金沢城-」『加能史料研究』12号、2000年
- (10)註1 吉岡文献
- (11)佐伯哲也「前田家の城 - 金沢城を中心として - 」(金沢城・城下町学際研究プロジェクト第6回研究会発表、2001年
- (12)吉岡康暢「金沢坊から金沢城へ」『いま甦る金沢城 - 金沢城の歴史と魅力を探る - 』石川県教育委員会協賛(財)石川県埋蔵文化財センター、金沢城・城下町学際研究プロジェクト、2001年
- (13)北野博司「石垣から見た前田三代の金沢城」金沢城・城下町学際研究プロジェクト第10回研究会発表2002年、『北陸中日新聞』平成14年4月18日記事
- (14)註8 見瀬文献
- (15)池 享「武家官位制の創出」『大名領国を歩く』永原慶二編、1993年
- (16)註12 吉岡文献

補註 本文に引用した文献史料は、とくに断らない限り、石川県教育委員会『金沢御堂・金沢城調査報告書』(金沢城史料編)1991年による。写真1・2、図2・3は、金沢城研究調査室より提供をうけ、本文にも有用な指摘をいただいた。